# ヨーロッパの旅

平井信義

ヨーロッパの旅も、決して楽しいことばかりではなかった。悲しいことも、不愉快なこともたくさんあるものだ。殊に、生活の様式のちがいからくる誤解は、とかく生活を暗くする。そんなことの連続であることもある。妙なだまされ方にあって癪にさわることもある。日本にいる時と少しも変らないようなだまされ方をすることもある。

しかし、帰国してみると、そのような不愉快なことは人に話したくない気持になる。殊に歓呼の声に送られ、歓呼の声で迎えられると、つい失敗談・不快談を言いそびれてしまう。そして、いつも輝かしい生活を続けたような話になってしまうことが多い。しかも、帰国後日時がたつにつれ、不快なことがなつかしい思い出とさえなって現われてくる。人間とは、まことに情なくもあり、おめでたくできている。

*

第一回の危険な事態は、ミラノで起きた。既にヨーロッパの生活も半年となり、初めての大旅行を試みたときのことである。フランクフルトを二月下旬に出発して、ミュンヘンからウィーンに入り、ヴェニスからミラノへ着いたのが三月八日であった。

その日はまだうすら寒く、どんよりと垂れた雲の間から、思い出したように光線が流れて来た。駅から程遠くない安宿に荷物を置くと、その足で町に出た。地図を頼りにあちらの寺院、こちらの町角と歩き廻り、スカラ座の切符を漸くの思いで手に入れた。しかし、私の見たいと心に残っている絵があった。有名な「最後の晩餐」で、何とかいう寺院の中にあると、案内書に書いてあった。その寺院を探すのであるが、なかなか見付からない。同じ電車通りを、二度も三度も横断し帰ったりして、まごついた。通りすがりの人に聞いても、知らないと言い、或いはいい加減の方向を自信なさそうに指差したりした。次第に時間が立つ。閉館は、多くの施設では四時頃であり、明日は朝ジュネーブへ出発しなければならないから、その暇はない。私は、いらいらした。

漸く、その寺院の入口に立ったのが三時半頃であったろうか。黄色く塗られた小さな建物であった。入場券を買って中に入る。

二、三人の人がゆっくりとした足取りで私と行きすがったが、私の眼は、壁にはめ込まれた何枚かの絵の中から、目的の絵を見つけるために熱心に輝いていたと思う。しかし、一巡したところでは、その絵がなかった。もう一度引き返したが見当らない。おかしなことがあるものだ、確かに案内書に書いてあったはずだがと、ポケットからそれを取り出すと、たしかに間違いない。私はいら立った。そして急ぎ足で入口のところに戻り、台の上に絵葉書や記念品をおいてそれを売っている女の人のところへ歩み寄った。中年を過ぎた太った女の人が、台のうしろに坐っていたが、背の方にいるもうひとりの女と声高に話をしていた。その話を中断することをちょっとためらったが、「最後の晩餐」の絵はどこにあるか、ときいた。ところが、その女は返事をしないで喋りつづけている。私は、腰をかがめるようにして、もう一度たずねた。それに対する返事は、まことにそっけないものであった。ちょっと手を伸ばして、奥の方を指差し、再びもうひとりの女と喋り出したのである。私は癪に障りもし、これ以上たずねても無駄であると断念して、再び奥へ引き返した。そして、もう一度、たん念にうすぐらい部屋の壁を迎いだ。漸く二つ目の壁の高みにそれを見付けたのは、閉館間際に迫っていたろうか。その絵は、小腋にかかえられる位の、小さな絵であった。照明もないで、ぼんやりと見るより他はない。急にガッカリした。この絵を見るために、一時間以上もいらいらしたのかと思うと、その落胆はひどかった。その絵の価値は既に定評があるが、私の心はその価値を受け入れる余裕がなかった。鑑賞などというものではない。こんなものなら、町をぶらぶら歩いていた方がよかった——とさえ思った。

旅先でものをたずね、その時にそっけのない扱いを受けると、その土地の人から小突かれたような感じをするものである。私は、足早にその寺院を出て、空を仰いだ。雲の一筋だけが赤く光っていた。私は、煙草に火をつけた。

その時「ハロー」と呼びかけながら、私に近寄って来た若い男がいる。髪の毛はむしろ横を高く刈り込んだ形に近く、地味な服装をしていた。「あなたは、日本人ですか？」と私の前に立ちながら英語で言った。私が「そうだ」と答えると、「これからどこへ行くか？」ときいた。そこで、博物館の方向を地図で示すと、「自分もその方にいくから、案内をしてやろう」といった。

その時、私は救いの神——と思った。くさくさし切っているところであったし、イタリーにだって親切な男がいるものだと思った。「それはありがたい。私はこの寺院を探すのに困難して、焦立っていたところだ」と附け加えていった。

二人は右になり左になりながら、並んで歩いて行った。「自分は戦争中、マニラにいたことがあるが、そこで日本人の何人かとつき合っていた」というようなことを話した。私も「いま西ドイツで留学中で、初めてイタリーを旅行しているものだ」と話した。ドイツにいた——ということをきくと、彼は急にドイツ語に話し方をかえた。ドイツ語の方が話しやすいとも言った。私も、英語よりドイツ語の方が話しやすい。そこでドイツ語で応答を始める

と、更に気が軽くなるような思いがした。

間口が狭いので、そそり立ったような教会の前に二人はやって来た。彼は、口早に「これが有名な何とか寺院だ」といった。そして、「ちょっと中を見ていかないか」といった。私には異存がない。その男のあとに従って、石段を数段上っていった。その入口に、乞食がいて、二人の上ってくるのを待ちかまえているようであった。彼は、自分のポケットを探るようにして一枚の硬貨を取り出して、その乞食に与えた。そして中に入ると、献灯をするための台が備えてあった。彼は、再びポケットからお金を取り出してろうそくを買った。そのまま奥には入らずに、片ひざをついて指を組み合わせると、うずくまるように頭を垂れて、お祈りを始めた。敬けんな人なのだなあ、だから異国の者にも親切にするのだなあ、と、私も神妙にその男の側に立って、高く暗い天井を見廻していた。

再び、連れ立って、その寺院の石段をおりた。彼の誘う方にと、肩を並べて歩いた。時々、大きな建物について説明することを、彼は忘れずにしてくれた。その度に、私は大きくうなづいた。

道が二つに分かれる所で、彼は建物から離れて広々した空間を感ずるような方へと、道を選んだ。そのあたりは公園だな、と私は思った。しかし、頭の中に描かれている地図では、私の目的地とは大部離れた方角に公園があるはずであった。もう一度、頭の中の地図を思い返してみると、やはりそうであった。私は、この男が私の目的地をまちがえてきいているのではないかと思った。

「この方向で、博物館の方にいけるのだろうか？」と私はたずねてみた。

「そうだ、この方が近道でいけるのだ」と、彼は答え、少し速度を早めた。

おかしいな——と思いながらも、この男の言うことは間違いなかろうと、私は自分の疑惑を抑えながら、彼に従った。

その道は、やはり公園に通じていた。未だ青いものの一つも感じられない公園には、枯れた芝生の間をくっきりと道がつけられていた。鉄のベンチや屑籠が、寒々とした感じでおかれている。誰も人が通らない。あたりには、暮れかかる前の一と時のあかるさが漂っていた。

ふと見ると、ちょうど公園の真ん中と思われるところに、四、五人の人の群が、認められた。

「何をしているかな？」

と彼はつぶやいて、どんどんとその方に歩みを進めていく。私も、「何をしているのだろう」——そんなことを言いながら、彼のあとを追うようにした。

近寄ってみると、四人ほどの男の人たちであった。ひとりが真ん中に半坐りとなり、他の三人がそれを取り囲んでいた。私たちが近寄っていくと、ちょっと振り向いたがそれには頓着せずに、何か熱中している。その背からのぞき込むようにして、私の案内人の男が立った。

そこには、我が国でも見られるようなトランプの賭博が開かれていた。三人の男たちは、札束をポケットから出しては何かわめきながら、賭けていた。一と渡り――といっても、二～三分であったろうか――すんだ時に、例の男は、「自分もやってみるから」といいながら、うちポケットから札束を出して、何か言いながら賭けた。二～三回繰り返している中に、彼の手持の札束は、三倍～四倍になっていく。「どうだい」とばかり振り返って、彼は私の方を見た。更に一回やって、どさっと札束をとった時、彼は、私に向って、「やってみないか、ドルを持っているだろう」と言った。

この時はじめて私は我に返った。自分のことなのだ――と思った。危険が身に近寄っている。私の心臓は、早鐘のように打っている。どうしよう――ためらった。どうして虎口を脱したらよいだろう――とっさに思いをめぐらした。

「もう一度、あなたがやってみてくれないか、その上でやってみよう」

ということばが、私の口から出て来た。彼は私に背を向けた。真ん中の男がトランプを繰り始めた。他の二人の男が、口々に何か言った。その間、私はしっかりと荷物を小脇にかかえた。そして、道の比較的まっすぐついている方向を見定めると、矢庭に走り始めた。走った。振り向かずに、まっしぐら、私の全力をあげて走った。幸い、そう遅い方ではない。しかも、ヨーロッパを歩き廻るくせがついて、足も鍛えられている。外套の裾がすこし足にからんで、もたついたりしたが、それでも、相当のスピードである。

何秒走ったか知らない。後から追って来る気配が全く感じられなかったので、ふと振り返ってみた。男たちの姿が、ちょうど半分位いに見える距離にあった。四人は、棒立ちにたって、こちらを見ていた。追おうともしない。あっけにとられているような姿で、動くこともせず、八つの目だけがじっと私を凝視しているような感じである。

私はホッとした。虎口を脱した。うろうろしていたら、身ぐるみ取られてしまったかも知れない。抵抗すれば、半殺しになったかも知れない。しかし、最早、追いつくことは出来ない。脱れることが出来たのである。

その時、私は、ちょっと手を振る気になった。立ちどまって、瞬間、ばいばい――と手を頭上に挙げて、二度ほど振った。そして、再び前を向いて、前と同様のスピードで走り去ってしまった。

＊

その晩、私はスカラ座の一番階上の席にいた。タキシードのない者は、それより下の席を取ることは出来ないのである。立派な若い男性や、胸元もあらわな女性が、芝居の始まる前の一と時をあちらこちらの席で、うごいていた。オペラグラスで見ると、目も奪われる程の美しい女性がいた。ひとりのみではない。オペラグラスを廻す先々に、そのような美しい顔立ちがあった。